

〈1〉 中東における緊張の高まり：フーシ派、イラン、そして紅海での戦闘

中東金融・エネルギー問題専門家 中嶋 猪久生

はじめに

今から30数年前、中東湾岸のバーレーンに勤務していた筆者は、イエメン産原油取引に関わる事務打ち合わせのため、同国の首都サヌアに同僚と2人で不安を抱えたまま出張し、イエメン中央銀行を訪問したことがある。当時、イエメンと言えば、世界の最貧国の一つというイメージしかなかったが、現地でも強く受けた印象は次のようなものであった。

- ◆ドバイで乗り継ぎに28時間を要した。予定されたイエメン・エアーが故障し、サヌアから代替機の到着が大幅に遅れたため（エライ所へ行くことになったなあ…）、
- ◆街中に出ると、腰に「ジャンビア」を差し、口中で、アンフェタミンに似た覚醒作用をもたらすといわれる「カートの葉」をクチャクチャと噛んでいるイエメン人の姿を多数見かけた（ギョッ…）、
- ◆街中を走る古ぼけた自動車をラクダに置き換えれば、中世のアラブ世界はかくの如しか…、
- ◆中央銀行のビルにはエレベーターはなく、ハーハーと喘ぎながら5階まで徒歩でたどりついた（サヌアは標高約2,300m）、
- ◆ホテルでは高地のため沸点が低く、ふやけたスパゲッティを食すことになった、
- ◆帰路、サヌアの空港で、ドバイ行きのフライトを探したところ、到着・出発便の電光掲示板がなく、空港職員が黒板にチョークによる手書きで、しか

も、アラビア語で書いていたので、同僚が「ドバイ、ドバイ」と叫んでフライトの確認ができ、何とか搭乗し、バーレーンにたどり着いた（ヤレヤレ…）、等の記憶が蘇ってくる。



その後、イエメンとの関わりを持つことはなかったが、2024年以降、イランの代理勢力として長くテロ活動を続けてきたハマスやヒズボラについて資金・武器調達等を分析(2024.3 Vol.210 CISTEC ジャーナル / 2025.5 Vol.217 CISTEC ジャーナル)する機会を得た。その後、筆者の原稿を読んだ一部の読者から、もう一つの代理勢力で、国際貿易に大きな影響を及ぼしている「フーシ派」についても分析してみたらどうかと、背中を押され、本稿で第三部として

「フーシ派」の分析を試みることにした。

2023年10月7日に勃発したハマスによるイスラエル攻撃と、その後のイランとヒズボラを巻き込んだ武力衝突は、中東の緊張をこれまでになく高めた。この地域における紛争の激化に伴い、イランの役割と地域全体で活動する過激派グループの関係が新たにクローズアップされている。イランは1979年の革命以来、現在に至るまでテロ支援国家であり続け、複数の過激派グループに活動資金や武器を提供し、指導してきた。中東全域に拡大する代理組織ネットワークはイランのイデオロギーを推進し、敵対勢力に対する地域的権威の拡大を狙いとしてきた。イランとこれらの代理組織との関係を理解することは、現在進行中の出来事を理解するためにも必要なことである。特に、イエメンのフーシ派は、紅海における国際商船や軍艦への攻撃により世界的な注目を集めている。本稿では、イランが作り上げた「抵抗の枢軸」と、フーシ派を中心に、同組織とイランとの複雑な関係、イスラエル・パレスチナ紛争との繋がり、フーシ派による紅海での攻撃が世界貿易に及ぼす影響、フーシ派の資金源と武器の入手方法、米国やサウジアラビアとの関係、フーシ派を支援するロシアや中国との関係等に焦点を当てることとする。

第一章 フーシ派とは？

1-1 シーア派という呼称

「シーア派」という呼称は、彼らの敵対者が用いる蔑称に近い呼称であり、彼ら自身の組織名は「アンサール・アッラー（神の守護者）」と称している。一般的にはフーシ派という呼称が主流となっているので、本稿ではフーシ派という表現を使うことにする。「フーシ」とはフーシ派の創設者であり、政治家でザイド派の活動家であるフセイン・バドル・アッディーン・フーシを指している。

1-2 背景と起源：フーシ派はどこから来て、イエメンの歴史の中でどのような役割を果たしてきたのか？

■シーア派の分派としてのザイド派

イエメンには、イエメン北西部の辺境の地サアダ

県に定着し、シーア派の分派であるザイド派を信奉する集団が作ったザイド派社会が存在した。イスラム教シーア派内の少数派宗派として、長らく存在したこの共同体は、イエメンで繁栄し、この地域の主要な政治勢力となった。9世紀以降、イエメン北部には、1千年間、ザイド派のイマーム（イスラム教指導者）と政治家によって統治される王国が存在し、栄枯盛衰を繰り返しながら、この地の宗教・政治・社会勢力となった。

■王制から共和制へ

1962年、エジプトで訓練を受けたイエメン軍将校がザイド派の王制を打倒し、イマーム制にかわる軍事政権「イエメン・アラブ共和国」を樹立した。ザイド派は旧体制との繋がりから新政府への脅威とみなされ、厳しい弾圧を受けた。以来、政治的権力を剥奪されたザイド派は、イエメンにおける権威と影響力の回復に苦闘してきた。1990年の南北イエメンの統合により、イエメン共和国の成立後、ザイド派は国内の北部と西部、そして首都サヌアで多数派を占めていたが、人口全体から見ると少数派となった。推計によるとイエメン人口の65%はスンニ派、35%はシーア派。シーア派の大半はザイド派。南北合併後、政府は北部におけるザイド派の支配の弱体化を狙い、サウジアラビアとつながりのあるスンニ派の2つの分派、サラフィー派とワッハーブ派に属するイスラム教徒に対して、ザイド派の伝統的な領土の中心部に定住を促進する政策を推進した。このような動きの中でスンニ派の影響に対するザイド派の抵抗が反乱という形で発展していった。

■フーシ派の反乱：ザイド派の復興運動から軍事的反乱へ発展

1986年、イエメン北部のサアダ県でザイド派の政治・社会復興を志す草の根運動が出現した。主導者は著名なザイド派聖職者の息子であるフセイン・バドレディン・アル＝フーシで、この運動に「フーシ」という名を与えた。彼はフーシ派こそがザイド派の宗教と文化の擁護者であり復興者であるという主張を掲げ、支持者を結集させた。この運動は「信仰青年団」という名称で政治活動を行う組織に変貌し、フーシ派は自らを「アンサール・アッラー（神の守護者）」というスローガンを掲げるようになった。

■フーシ派と南北イエメン統一後の中央政府との対立と軍事的衝突

1990年、南北イエメンの統一後に成立した中央政府によるシーア派ザイド派組織「フーシ派」と政府の対立や軍事的衝突を受けて、国連による和平交渉の仲介努力にもかかわらず、シーア派の反政府勢力と国際的に承認されたイエメン政府及びその支援者との間の戦争は、10年以上、止むことなく長期化した。状況が大きく変化したのは2002年。南北イエメン統一後の中央政府は、前述のフーシ派によるかかるスローガンの使用を差し止めようとしたため、フーシ派と政府の関係は悪化の一途を辿り、2004～2010年にかけて6回に及ぶ中央政府と大規模な軍事衝突（フーシ戦争）を続けてきた。

■フーシ派とサウジアラビア・UAEとの緊張と軍事衝突

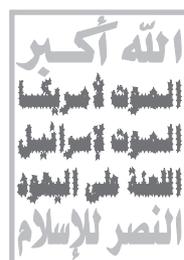
1990年の南北イエメンの統合を契機に、フーシ派は1990年代にイエメン北部で台頭してきたシーア派はスンニ派が多数を占める中央政府が主導するサウジアラビアの経済・宗教的影響力に対しても、強く反発するようになった。2009年11月、フーシ派は中央政府への武装反乱（第6次フーシ戦争）の過程で、越境してサウジアラビアに侵入した。サウジアラビアは反政府勢力への空爆と地上攻撃を開始した。ここからフーシ派とサウジアラビアの戦闘が始まった。以下はその経緯である。

2009年	第6次フーシ戦争。サウジ軍が同盟国なしで海外に展開した初めての例。反政府力の拠点へ空爆と地上戦を開始。
2015年3月	サウジとUAEが主導する連合軍（9カ国のスンニ派連合軍）との戦闘。フーシ派の拠点を空爆。国連の仲介にもかかわらず、フーシ派とイエメン政府及びその支援者との戦闘は長期化。サウジはこの攻撃を受けて、イエメンとの国境をほぼ全面的に閉鎖。
2016年	国連の和平仲介（3回）は失敗。
2017年	フーシ派、イエメン北部をほぼ掌握。政府軍のサレハが率いるサレハ軍を首都から追放。
2017年11月	フーシ派、サウジの首都リヤドのキング・ハリド国際空港に弾道ミサイルを発射。米軍が迎撃。
2017年12月	フーシ派反政府は停戦・和平の直接交渉を開始。フーシ派の代表団、サウジを訪問し停戦・和平の直接交渉を開始。
2018年	フーシ派によるサウジへのミサイル攻撃は活発化した。・同年7月、サウジの石油タンカーが損害。2018年、両派は和平合意、しかし、2019年、破綻。
2019年9月	サウジの主要石油処理施設アブカイクなど2か所へドローン攻撃。
2022年1月	フーシ派ドローンと弾道ミサイルでUAEを標的とし、紛争の範囲を拡大。UAEと米軍はフーシ派がアブダビに向けて発射した弾道ミサイルを迎撃。パトリオットミサイルを発射して反撃。フーシ派は、UAEが「危険な国になった」と警告。
2022年	国連の仲介で停戦合意。

1-3 フーシ派の政治的見解とは？ そのきっかけとは？

当初、フーシ派武装勢力はヒズボラを模倣していたとされる。フーシ派には、組織として「綱領」のようなものではなく、一貫したイデオロギーを掲げていないという見方をする専門家もいる。しかし、彼らは民兵組織にもかかわらず、政府に対し6回の武装蜂起（フーシ戦争）後は政治に関与するようになっていく。きっかけはフーシ派の「信仰青年団」と統一後の政権との対立であり、政権を支援した外国勢力の介入に反発したことが大きな原因となっているようだ。そこで出てきたのが、同じシーア派のイランがよく唱える「アメリカに死を」という合唱を仿

彿するスローガンを掲げ、フーシ派の紋章にある5項目のスローガン、「神は偉大なり、アメリカに死を、イスラエルには死を、ユダヤ人を呪え、イスラムに勝利を」というフレーズで構成されているものである。



出典：Wikipedia